

十三篇の遺書

— 李箱の遺書に表れた芥川龍之介の影 —

The thirteen will

— The influence of Akutagawa Ryunosuke in ISang's will —

辛 大基

Shin Daeki

要旨 李箱の代表作「終生記」は遺書として書かれた作品として知られている。この作品で問題視したい箇所は、序文に「十三篇の遺書」を書いてきた事実を明記していることであるが、そのため李箱の遺書は「終生記」だけではなく、他にも存在することが推測できる。ただしそれについてははっきりした資料が残っていないのが現実である。もう一つは「終生記」には芥川龍之介の遺書と自分の遺書を比較しながら、そこから離れて独自の作品を書こうとする決心も表れているため、李箱独自のスタイルとともに芥川からの影響関係をも考えられるのである。したがって本論では、このような李箱の遺書をめぐって、作品の構造や内容を分析することによって「十三篇の遺書」を見つけ出すことを試み、また芥川の遺書と比較を試みるのと同時にそれを通じて改めて李箱の遺書の本意を考えてみたいと思う。

1. 李箱作品に表れた芥川龍之介

李箱の散文、つまり小説や随筆には「芥川龍之介」の名前が二ヶ所登場する。一つは東北帝国大学英文科に在学していた友人金起林宛に送った手紙で「生に対する勇氣、好奇心こういったものが日々希薄していくのを自覚します。これは真に濟度できない悲劇です。芥川や牧野のような人たちが味わったはずの、最後の刹那の心境は私もまたある瞬間電光のように短く、しかしながらはっきりと味わうことが近頃一、二回ではありません。」¹と送ったところに見え、もう一つは小説「終生記」で見えるが、「私はその日の朝、何の理由でか歯を磨きながら作成中の遺書のせいでうんうん唸った。十三篇の遺書がほとんど完成していくのだ。しかしどれを取り出してみても全てが三十六歳に自殺した、ある「天才」が枕元においていった蓋世の逸品の亜流から一步も逃げられなかった。」²と書いたところである。前者は、東京に着いた李箱にとって最も身近で、頼れる人物が金起林しかいなかったため、寂しさのあまり彼に東京まで会いに来てくれることを誘ったり、挫折感を吐露したりしながら送ったいくつかの手紙の中の一つで、孤独感の中で死んでいった芥川の心境を自分も味わったことを述べた文章である。後者は自分の終生記つまり遺書を書くという小説の設定であり、自分はそれを凌駕するものを書きたかったが、できなかったことを記述している。

これ等の記述から考えてみると李箱は芥川から相当の影響があったことが推測できる。「終生記」での記述は、遺書を書くに当たってそのモデルとしたのが芥川の遺書であることを示しているが、その遺書とは「或旧友へ送る手記」を指していることは疑いの余地がない。なぜなら「或旧友へ送る手記」は遺書として発表された作品であるためだ。

李箱が芥川作品を耽読していた根拠を提示してくれるのが、文鍾麟の「いくつかの意義」³と尹泰栄・宋敏鎬の『絶望は技巧を生み、』⁴である。文鍾麟は、李箱が養子にいった伯父の家に長年の間下宿をした人物で、それをきっかけに李箱との交友関係は深まり、李箱に精神的、知識的に与えた影響が多く、しかも「蜘蛛会冢」など、いくつかの李箱作品のモデルになっている人物でもある。そのため李箱の普段の生活を述べたところは相当の信憑性があると言えるが、その文書で文鍾麟は「この頃箱はこれまで愛読してきた菊池寛の小説を通俗作品に過ぎないと罵倒しながら芥川と牧野の作品を選んで読んでいた」と述べている。また尹泰栄は李箱が所属していた「九人会」のメンバーの一人で、『絶望は技巧を生み、』は李箱の生涯や逸話を詳しく紹介している。尹泰栄はそこで「この日、李箱は東京に行ってやることをしゃべりながら、『まず、自由主義者長谷川如是閑に会う』と、私の机の上にあった、日本の評論家でありながら自由主義者で、当時独裁を反対しながら熱烈な論陣を広げた長谷川の文書が載せられた日本の雑誌『改造』を読みながら声を高めたのである。」と述べているが、このことからさらに李箱が普段から『改造』を熟読していたことが分かる。李箱がどれぐらいの量を読んでいたかは定かではないが、芥川作品も多数載っていたことを考えると相当の量を読んだに違いない。特に「終生記」のモデルになった「或旧友へ送る手記」を始め、「或阿呆の一生」、芥川の死についての批評などが載っている。

以上のことから李箱が芥川作品、特に末期作品を耽読していたと判断されるのであるが、だとすればそれらが李箱作品の中ではどんな形で溶け込み、どう反映されているのか述べるを得ない。

2. 「十三篇の遺書」— 遺書としての作品「終生記」と「或旧友へ送る手記」

既に知られている通り、芥川の遺書として挙げられる作品は「或旧友へ送る手記」であるが、以外にも遺書として残したのは「芥川文子あて」（昭和二年七月二十四日）、「芥川文子あて」（昭和二年七月）、「わが子等に」（昭和二年七月）、「菊池寛氏あて」（昭和二年四月）と未定稿「遺書」がある。このように多くの遺書を残したのであるが、この中で李箱が接することができたと考えられるのは、言うまでもなく、「或旧友へ送る手記」である。なぜなら、他の文書は後年初めて全集に収録されたため、時間的に考えてみると李箱の死後から大分経っている時点での出来事である。

「或旧友へ送る手記」は久米正雄に送った文章で、「僕の死後にも何年かは公表せずに置いてくれ給へ」とあるように、遺書でありながら、公表を念頭に入れた作品でもある。しかし久米がそれを昭和二年七月二十四日の夜、『東京日日新聞』に公表することによって、

直ちに知られるようになった。このことに関して多くの研究者が一般読者を意識した、落ち着いた文章であることや、ひいては死後すぐに公表されることを予期していたということまで述べられてきた。李箱の「終生記」においても遺書でありながら、真摯な態度は無く、遊戯的な態度しか取られていないため、遺書としての本来の目的を成し遂げず失敗したとの意見⁵もあるが、その点共通性を見せていると言える。ともあれ芥川自身もいつかは公表するつもりで書いたのは確かであろう。ただし直ちに公表されることによって、日本の文壇に研究の素材を提供したのは勿論、そのことによる『改造』に載せられた論評は李箱にとっても耽読していた芥川という作家に関する内面の事情がより正確に分かるようになるきっかけを提供しただろう。

3. 十三篇の遺書

先述したように「十三篇の遺書がほとんど完成していくのだ。しかしどれを取り出してみても全てが三十六歳に自殺した、ある「天才」が枕元においていった蓋世の逸品の亜流から一步も逃げられなかった。」と李箱にとっては「終生記」は遺書のもりで書かれた作品である。なぜこの作品が遺書になるのだろうか。まずこの作品の構造から述べてみよう。「終生記」は非常に入り組んだ構造をしている作品であるため、その構造のメカニズムを理解するのが作品を理解し、本論の主張を裏付ける道である。

李箱の多くの作品と同様、作品創作の原理をアフォーリズム⁶として冒頭に挿入するのが常套的な手法である。これが作品構造の一部を占めている。

卻遺珊瑚—この五文字の内、私は二文字以上の誤字を犯したかと思う。これは私自ら天を仰いで恥じるべきことだろうが、人智が発達していく面目が実に躍如たるものだ。

死ぬことがあってもこの珊瑚ムチをしっかりと握って死ぬ。あなたの廃袍破笠の上に色褪せた亡骸の上に鳳凰が降りて座るだろう。

私は私の「終生記」が天下の学識ある連中の肝胆を寒からしめることをしみじみに願う一念の下、これほど吝嗇した私のお洒落の節約法を披瀝して見せる。

一発砲声に止むを得ず英雄になってしまった稀代の軍人某は九十歳の恐れ入った一生を終える日、これといった遺言一つもしゃべらず臨終の場面をよくも（無事に ヒューと溜息がでるほど）済ませた。

ところで私たちのレフオチカー—愛称トルストイ—は風呂敷包みを背負って出掛けたまではせいぜいそれらしく飾ったが、最後の五分に至ってつい台無しにした。些細な遺言の端っくれのせいで七十年もの念入りに築き上げた塔を崩し、見掛けにいい一生に消えない傷を一つ作ってしまった。

私は一個狡猾なオブサーバーの資格でそんな愚昧な聖人たちの生涯を傍聴しているため、私がそんな類のミスを知っても再犯するはずがないのである。

鏡を向かって髭を剃る。誤って私は傷をつける。私はかっ腹を立てる。

しかしやっさもっさ大騒ぎする複数の「私」と私は正面から衝突するため、彼らはそれぞれベストを尽くして自分だけを弁護するため、私はなかなか犯人を見つけ出しにくいとのことだ。

だから大抵おろかな民衆は「猿が人間の真似をする」と安心して過しているようだが、事実人間が猿の真似をしながら過しているところ、至当な典故を理解できないせいである。

嗚呼一挙手一投足が既にアダムとイブのそのような衝動的な習慣からは脱却して長くなる。反射運動と反射運動の狭間に挟まれて暫時実に電光石火ぐらいに指が自意識の捕虜になった時、私はせっかく私の虚無の年月の中で閑却している奇岩たる私の鼻を少し触ったりするか、高貴な対話と対話が並んだ鎖の間にも正に間髪を許容する窓があり、その鋭い刃が自意識を掴む暇もなく両断する瞬間、私は私の明鏡のように澄むべき至宝たる両目にもし目糞がついていないかというように適切に皺ついたハンカチを取り出してはその両目を触ったりするか――

私の魂魄と四大の大人しい怠慢性がそんな些細な煙火をいちいち追いながら（見て来て）私の統括される処に告げなければならないそんな圧倒的忙殺を私は到底受け入れられない。

しかし私は私の至重なる珊瑚鞭を自慢したい。

「くず」「生ごみ」

この薄汚い単字の雰囲気を足下は満足に理解されますか。

足下は足下が基督教式で結婚する日、ナイブ・アンド・アイルでこの「くず」「生ごみ」に近似した感興を味わったと思われるのだが、果たしてそうではありませんか。

私はそんな「くず」か「生ごみ」のようなテープを一私の終生記の処々に可憐に植えておいた些細な飾りのために一投げてみるのだが、―― 多幸に拍手する。 以上

日本語に訳して読む方が韓国語より意味が通じていると思うが、李箱の文章はこのように日本語に近いと言える。それにしても意味が通じないところは多い。李箱はわざとこのような難しい文章を冒頭に置いたのであるが、そのことによってこの作品の方法や意図を推測できる手がかりが隠されているのである。

「卻遺珊瑚」の四文字の熟語を置いて五文字とみなし、二文字以上が間違っていると謎めいたことを書いているが、修辞学をたくみに使って文字遊戯あるいは記号遊戯を行ってきた李箱らしい展開である。したがってここからは何らかのゲーム性を見つけ出さなければならない。この四文字に関する意味は全集編集者の金允植⁷⁾によって既に解釈されている。それによれば「卻遺珊瑚」の誤字とはまず次の文章に「死ぬことがあってもこの珊瑚ムチをしっかりと握って死ぬ」とあるため、最後の一文字が「鞭」であることが分かる。またその文脈上「珊瑚鞭を残したい」の意味として「卻⇒欲」つまり「ゲキ」を「ホシイ」に正せば意味が通じると述べている。これから連想されるのは中国故事の崔国輔の「少年行」

の五言絶句であり、そこに「遺却珊瑚鞭／白馬驕不行／章台折楊柳／春日路傍情」と珊瑚鞭を忘れてしまい、遊郭で遊ぶしかないことを歌っているため、「終生記」は女（正確には少女）と遊ぶことを描いていくことを示している。それを謎解きのように言葉をたくみに利用して読者が解けるかどうかのゲームをしているのである。

しかし絶句の主人公は珊瑚鞭を無くすことによって日常を忘れて女遊びができたことに対して李箱はむしろ「死ぬことがあってもこの珊瑚ムチをしっかり握って死ぬ」と逆のことを言っている。このことは、李箱にとって珊瑚鞭は遺書つまり「終生記」を指しており、それが「天下の学識ある連中の肝胆を寒からしめる」武器として「至上最大の傑作」⁸を書きたかった李箱の芸術熱を示してもくれる。李箱自身は「九十歳の恐れ入った一生を終えた東郷平八郎のように遺言無しで死ぬのもトルストイのように最後に遺言を残したため、「七十年もの念入りに築き上げた塔を崩し、見掛けにいい一生に消えない傷の一つ作ってしまうこともしないと言っている。遺書を残しても残さなくても世間に笑われるという立場を取っているが、この矛盾の中で、それを李箱はどう克服するか狡猾なアイディアを出している。

つまり第三の方法として上記の両者の方法を取らず、自分の方法で行うことである。しかし具体的な方法を提示しているのではなく、得意の修辞学をもって克服しようとする精神が表れる。実際李箱にとって珊瑚鞭、つまり遺書とはただ一九歳のずる賢い少女との恋愛関係を描いたものに過ぎないのである。これだったらトルストイ云々しながら大言壮語した「天下の学識ある連中の肝胆を寒からしめる」壮大な遺書になれないことは明らかである。したがって何らかの手法をとらないといけないのだが、それがパラドクス、ウィット、アイロニーである。多数の自分を設定したり、人間と猿を混乱させたり、意味の分からない文章を並べたりしながら得意の修辞学を持って戯れている。それは自分も「到底受け入れられない」ほどのものであるが、それにしても遺書を成し遂げて世間に自慢したいのである。その後の文章は自分の遺書が少女との恋愛話であることを再び明かしている。新郎新婦を「くず」と「生ごみ」に例え、それを自分の遺書の処々にばら撒くことを述べている。

ここまでが遺書の創作原理を述べたアフォーリズムであるが、作品の構造はさらに三つに分けることができる。つまり三つの視点が存在するのである。物語自体は特にこれといったほど大きな事件や外部的な葛藤は見えず、正に単純な出来事しかない。要約してみると、【私の専有物になりたく、会ってほしいという「貞姫」の速達を受けて約束の場所に向かう。彼女に会った「私」は彼女の不道徳的な貞操無さを知っていながら「終生」を楽しむため、彼女の興味を引くあらゆる方法で「制圧」を試みるが、接近に失敗してしまう。すると今度は「酒乱」と「吐瀉」で攻撃したりもするが、これも通じないため、とうとう自殺をしようとする。これをやめようとする貞姫とのもめあいの中、彼女のスカートの中から「S」の手紙が落ちる。その内容とは、Sは昨日も貞姫に会って、自分とあっている今日も会うことにしたとの内容である。そのずる賢い貞姫の行動に「私」は衝撃を受け、昏

倒し、あの世をさまよった末、甦って目を覚ますが、貞姫は既にもいない。それを回想しながら私は終生記を書く。】との内容で、出来事自体は単純すぎるが、視点は三つに分かれるため、非常に読みづらい作品である。語り手は①作中人物の「私（李箱）」、②作中人物が書くテキスト（終生記）の中の作中人物の「私」、③この作品を書いている実際の作家、の三つの語り手の心境が交じり合っているため、読みづらいのである。「十三篇の遺書がほとんど完成していくのだ。しかしどれを取り出してみても全てが三十六歳に自殺したある「天才」が枕元においていった蓋世の逸品の亜流から一步も逃げられなかった。」と語っているのは導入部にあたるところで、①の作中人物の声であるが、その中で終生するために遺書を書いているのである。これは入り組んだ時間提示による遺書としての芸術度を高めるための手法であり、違う次元で客観化したもう一つの自分を観察することによって人生を振り返るという意味を持っているのである⁹。

以上のような構造を持っているのだが、上記の文章だけではこの作品が李箱にとって遺書に当たるかという疑問が生じてくるが、今まで構造に関して長く説明したのもこれが遺書であることを証明したかったためである。作品の後半に移ると③に当たる実際の作家李箱の声が登場し、作品を全体としてつかさどりながら自分の終生記であることを語っていることを考えてみると遺書であるに間違いはない。そうであれば十三篇の遺書ではなく、一篇の遺書に止まってしまうという問題も発生してくる。果たして十三篇というのは何を意味するのであろうか。これは作家李箱の声ではなく、「終生記」を書く作中人物としての視点である。

ここでもう一つを考えておかなければならないのが、李箱の自伝的な創作スタイルである。「終生記」は三つの語り手が登場するため、論じづらいが、他の作品、たとえば「金裕貞」「逢別記」などの語り手は作中人物の「私」によって語られているため、虚構の小説であるに間違いはないものの、伝記的な事実をベースにしているため、李箱自身の声が混じっている作品でもあるのだ。したがってここでの作中人物が回想しながら遺書を書いているところが自伝的な立場から書かれていることと仮定すれば、李箱は「終生記」意外にも遺書としての作品を書いていたことが考えられる。「終生記」を最後の遺書だとすれば、十二個の遺書とはどれを指すのであろうか。

まず考えられるのが「13」という数字との関連性である。李箱は「13」を非常に好んでいた。代表的なのが「烏瞰図詩第一号」で、「十三人の兇骸が怖いという」とあるように、その数字に特別な意味を与えているが、非常に観念的で、「終生記」でも単純に不安な心理を表すために用いられた表現である可能性もある。

しかし私はそれよりは、実際李箱が遺書を書いていたと考えたいのだが、だとすれば少なくとも終生記意外にも遺書として書かれた作品が存在することを意味する。実際、十三篇までには至らなくても、いくつか遺書として考えられる作品を挙げてみよう。

まず李箱の小説を分析してみると一つの手がかりが得られるのだが、全一六篇の作品の中で女性との関係を描いた作品は八篇である。自伝的な観点から分類すると李

箱にとって女性とは三人がいたが、それぞれ「クムホン」、「ビョンドンリム」、「クオンスニ」の名前である。これ等の女性がそれぞれの作品に違う名前で登場するのであるが、スタイルの特徴上、クムホン系列、貞姫系列というグループに分けることができる。クオンスニに対してはモデルとなった作品が「幻視記」しかないため、系列とは呼びにくい。

「経産婦」で、主人公より上の立場で主人公の世話をしている作品がクムホン系列で、「ずる賢い少女」が登場するのが貞姫（ビョンドンリム）系列と呼ばれているが、ところでこのずる賢い少女は「終生記」以外にも「童骸」「失花」「断髪」に登場するのである。

しかし次の瞬間自体は大きくなった。新婦が忽然と現われる。五月としては少し暑くないかと思われる洋装をした。こんな妊とは面識がないのだ。しかもそれだけではなく断髪だ。もしかして彼女は違う女かもしれない。（中略）だから、実は今朝にはお腹が空いている。このことから考えてみると先、妊がスカート、スリッパ、デュロウオーズ、背中を全て捨てて帰ってきたとの話は必然嘘だろう。（「童骸」）

「恋愛をしました！高尚な趣味—優雅な正確—こんなのがよかったという女の遺書です。—何で死ぬ？—先生—私だったら死にません—死ぬほど愛することができますか—ありますね。—だけど私には分かりません。」

（私は早くから愚かだった。知らないで妊と死ぬことを約束した。死ぬほど愛したけど面会が終わった後、おおよそ二十分か三十分経つと妊は私が「まさか」としか考えなかったSの懐にいた。）（「失花」）

翌日少女は彼の提案通り郊外の静かな部屋で、彼と対座して見せた。彼はまた彼の「ウィティズム」と「アイロニー」を無造作に振るいながら感動するような煙幕を張るのだった。（中略）「もう会えないでしょ。私は明日Eと東京へ行きます。」このようにとても素直に挑戦してみた。その時彼は多分この朝鮮の相手が自分だと勘違いして、すばやく首をむっと起こして対抗する。（「断髪」）

三つの引用の共通点は、相手の女が少女で、他の男と関係しながら主人公の自分を欺きながら関係が続いている設定である。特に引用の「失花」は文章の感じも「終生記」と一致していることが分かり、「断髪」では女性を口説く武器として「ウィティズム」と「アイロニー」を振るっているため、「終生記」での方法と同じであることが分かる。

このように考えてみると少女との恋愛話、しかも騙したり騙されたりしながら、裏切られたり限りない絶望を味わったりするということは「終生記」のモチーフと一致していると言える。このことは、李箱が普段から遺書を書くに当たって、自分の過去を振り返った時、女性のことが思いの大部分を占めているためである。この点芥川の作品を意識した証拠でもあると考えられるが、遺書を、自分の過去を振り返ることとして考えたのではないか。「或旧友へ送る手記」は正に自分の人生を振り返った自叙伝のような作品である。それだけではない。これと同じく『改造』に載って、李箱が読んだと言える「或阿呆の一生」

もまた遺書と呼ばれている作品として自分の半生を振り返って見た作品である。

李箱にとって自分の人生を振り返ってみると最も多かった事件、そして昏倒するほどの人生のミスは少女に騙されたことであった。李箱にとって短かった人生とは文学と女性を除くと残るものはほとんど無いのである。したがって李箱が遺書として人生を振り返りながら文章を書く時、ビョン、つまり貞姫との関係が最も重要なことになり、それに関する作品が多いのである。

実際、前述した「終生記」の複雑な構造の理由としては李箱の意図的な修辞学の遊戯もあるが、創作のスタイルによることも考えられる。「終生記」を書いたのは一九三六年十一月二十日東京に着いてからであるが、100パーセント東京で創作したものではなく、朝鮮で創作のアイデアを書きおいたノートを持って行き、それを参照にしたものである。「私は原稿の最初から最後まで続けてかけない癖があります。中間の一こま、一こまを書いておいて、それを再び繋いで新しく原稿を書く、そんな癖があります。」¹⁰と自分の創作スタイルを言っていたことが、同僚作家の回想からも分かるが、「終生記」もソウルにいる頃から書いてきたものを東京で、まとめて書いたと考えることができる。そのためスムーズな繋がりよりは断層が発生し、難しい構造を持たざるを得なくなるのである。したがって、李箱のスタイルは普段から遺書を書いてきたことになり、そのため、「終生記」と作品のスタイルや題材などが類似している「童骸」「失花」「断髪」は、ノートに書かれていた文章であり、「終生記」の一部になっても可笑しいところはない。逆に三つの作品が独立して発表されたことは、遺書として残したと考えても構わず、十三篇の遺書に入ると言えるのである。

それでは他には遺書として考えられる作品はないのか。それは李箱の作品の出発点まで遡って考えなければならない。出発点といえば小説「十二月十二日」であるが、この作品は『朝鮮』に一九三〇年二月から十二月まで九回にわたって連載された作品である。この作品にもまたアフォーリズムが載っている。ただし作品の冒頭、四回目が始まる前という二ヶ所も存在しているのが他の作品と違う特徴であるが、注目すべきものは四回目のアフォーリズムである。

一回目のアフォーリズムが芸術欲に燃えながら始まったとすれば途中で訪れた咯血は死の覚悟をさせるものであった。したがって李箱の文学は死の恐怖とともに始まり、このアフォーリズムはそれについての重要な鍵になっているのだが、要するに芸術に関する情熱もまたこれと離れては考えられない。またこのような形式は芥川の遺書がアフォーリズム形式を取っているのと同様で、当時では珍しい形式を取っているのである。ともあれ、咯血による死の恐怖から死を覚悟しながら自分の過去を回想し、さらにそれを記録として残そうとしたため、遺書として考えるべきである。

「十二月十二日」のアフォーリズムと同じモチーフを持っているのが遺稿の詩「作品第一番」（「一九三一年」）である。引用してみよう。

私の肺が盲腸炎を病む。第四病院病院に入院。主治医盗難一亡命の噂する。

季節遅れの蝶々を見よ。看護婦人形購入。模造盲腸を製作して一枚の透明硝子の向こう側に対称点を作る。自宅治療の妙を尽くす。

いよいよ胃病併発して顔面蒼白。貧血。

二

心臓の去処不明。胃にあるやら、胸にあるやら、二説紛紛して対処できない。

退寮の出血をみよ。血液分析の結果、私の血が無機物の混合ということが判明される。

退院。巨大なシャフトの記念碑立つ。白色の少年、その前面で狭心症で倒れる。

李箱の創作スタイルは「一こま、一こま」書くだけでなく、ジャンルも分けずに書いておいた草稿をベースに後日の都合に合わせて詩にしたり、小説にしたり、随筆にしたりするのである。したがって李箱の文章はこの三つのジャンルに拘らず近似しており、そのため実際ジャンルが分からなかったため、全集の編集者によって違う見解が生じ、小説や随筆の分類が各全集によって違う見解を見せたりもする。ともあれ、引用は詩でありながらも文章のスタイルは小説のアフォリズムとほとんど変わらないのである。つまり、草稿として書き下ろした文章の一つでもある。なぜなら詩として分類はされているが、詩としては長すぎるのである。引用では「一」と「二」しか挙げなかったが、このような段落が「十二」まで続く長い文章である。したがってこのままでも短い随筆として考えても構わないくらいで、少し手を加えれば十分小説にもなれる長さである。

このような観点から考えてみると引用の作品は「肺が盲腸炎」を病むという言語の遊戯性を見せているものの、結核による恐怖から始まっていることが推測できる。結核は当時にとっては難病で、医師も手を出せない病気であったため、李箱が医者に対して持っていた不信は高まり、どうにもできない診療はやめて旅行に行ったりもするのである。

4. 芥川の遺書と李箱の遺書

李箱の遺書が芥川の遺書をモデルにしたことはもう疑いの余地のない事実である。ただし芥川が友達に実際送った遺書であるのに対して李箱は「少女」に送らず全く作品として残したのが違うところである。「私信7」での芥川に関する記述は常に自殺を夢見てはいたものの、勇気や方法が分からなかった李箱が東京に来て初めて芥川の内面、つまり自殺の内面風景が理解できたと考えられるが、そのため、「終生記」をまとめることができたかも知れない。ともあれ芥川が死んだのは李箱が京城工業高等学校を通っていた時期で、二年生の時のことであったが、その直後『改造』に発表された「或旧友へ送る手記」や「或阿呆の一生」においてのアフォリズム形式や修辞学は当時としては珍しいものであった。李箱にとっては慣れているもので、むしろ芸術熱を刺激することであったはずだ。

金允植¹¹は芥川と李箱の共通点を養子出身であることから文学的な共通性を主

る。氏は李箱の文学の出発を養子入りから来るトラウマとして捉えているが、そこから来る不安などが作品の到る所に散らばっていることを指摘しながら、芥川の境遇と照らし合わせ、特に「西方の人」の「父」との設定の類似性を主張している。

それでは芥川の遺書と李箱の遺書との間にはどんな影響関係があるのだろうか。それについて述べてみよう。

まず先ほど述べた「終生記」の構造と「或阿呆の一生」の構造の類似点である。「剥製の白鳥」には遺書を書く自分が登場する。その自分は自叙伝を書くことに失敗するのであるが、自叙伝とは遺書のことを指している。これは終生記の構成と一致しており、影響関係を仄めかしている。詳しいことは紙面を別にして述べるつもりである。

次に考えられるのは、他の作家の遺書と自分を比較しようとするところである。

レニエは彼の短編の中に或自殺者を描いてゐる。この短編の主人公は何の為に自殺するかを彼自身も知つてゐない。君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を発見するであらう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の為に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行為するやうに複雑な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の将来に対する唯ぼんやりした不安である。(中略) 僕のみじみした心もちになつてマインレンデルを読んだものこの間である。マインレンデルは抽象的な言葉に巧みに死に向ふ道程を描いてゐるのに違ひない。が、僕はもつと具体的に同じことを描きたいと思つてゐる。¹²

芥川は自分の自殺の理由を不安であることを強調するため、レニエの作品を引用している。その中で主人公が何のために自殺するのか明らかにしていないため、周りの人はごく一般的な推測メカニズムによって推測するしかないという「自殺する甲斐」がなくなってしまうのを心配している。したがって自分はそれとは違う自殺する理由を明記しておくことによって無駄な自殺にならず、いい自殺を果たしたいという願いを込めている。またマインレンデルが抽象的に遺書を残したのに対して、自分はより具体的な遺書として残したい意志が伝わってくる。

このような意図は李箱の遺書「終生記」でも見つけることができる。「一発砲声に止むを得ず英雄になってしまった稀代の軍人某は九十歳の恐れ入った一生を終える日、これといった遺言一つもしゃべらず臨終の場面をよくも(無事に ヒューと溜息がでるほど) 済ませた。ところで私たちのレフオチカー愛称トルストイは風呂敷包みを背負って出掛けたまではせいぜいそれらしく飾ったが、最後の五分に至ってつい台無しにした。些細な遺言の端っくれのせいで七十年もの念入りに築き上げた塔を崩し、見掛けにいい一生に消えない傷を一つ作ってしまった。私は一個狡猾なオブサーバーの資格でそんな愚昧な聖人たち

の生涯を傍聴しているため、私がそんな類のミスを知っても再犯するはずがないのである。」と人生の最後、つまり終生を飾るにおいて東郷平八郎のように何等の遺書も残さないことやトルストイのように下手に残すことを否定しながら、自分はそのようなミスを二度と犯さないことを語っている。ただし、芥川が本当に自殺すること決心してから書いた文書であるに対して、李箱の場合は自殺する勇気なんかは微塵も無く、ただ「ポーズ」としての自殺願望であったため、自殺の理由を明かすより、遺書を書くか書かないか、あるいはどんな遺書を書くかの問題に関する覚悟としてのものである。このところからも李箱の修辭学的な遊戯の立場が窺えるのであるが、その点、芥川の影響を受けつつもより独自の作品へ挑戦しようとする姿勢も窺えるのである。

次は自殺方法を明記した点も考えられる。芥川は自殺方法や場所、そしてこっそり死ぬことを語っている。李箱にとっても自殺時間を明記している。次の引用を見てみよう。

① 僕の第一に考へたことはどうすれば苦しまずに死ぬかと云ふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。(中略) 轢死も僕には何よりも先に美的嫌悪を与へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へる為に失敗する可能性を持つてゐる。(中略) 僕は内心自殺することに定め、あらゆる機会を利用してこの薬品を手に入れようとした。同時に又毒物学の知識を得ようとした。

② それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺産に手よらなければならぬ。(中略) 僕は唯家族たちの外に出来るだけ死体を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。しかし僕は手段を定めた後も半ばは生に執着していた。従つて死に飛び入る為のスプリング・ボオドを必要とした。(中略) そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。

③ 最後に僕の工夫したのは家族たちに気づかれぬやうに巧みに自殺することである。これは数箇月準備した後、兎に角或自信に到達した。

④ 私は今秋風が音を出す私の薄汚い部屋に一人で終生している。(中略) しかしその手紙を受け取って欣喜雀躍、私は蓋世の経綸と遺書の苦憫を奇麗に洗い流すため、直に床屋へ行つた。私はかなりの豪傑らしく唇に齒磨き粉を白くつけてはその輝かしい鏡の前に座つて、そろそろ豪華壯麗に開幕しようとする私の終生を悠々と楽しむため、それに該当するため私の格好を收拾しようとするのである。

⑤ 私は事実少し目眩がする。私の衰弱した心臓としてはこのような自若した体操を長時間継続するのがとても難しいのだ。

墓碑銘だと。一世の鬼才李箱はその通生の大作「終生記」一篇を残して西暦紀元後一千九百三十七年丁丑三月三日未時、ここ白日の下でその波乱万丈(?)の生涯を終えてつい卒する。享年満二十五歳と十一箇月。嗚呼! 傷心大きい。虚脱だ。残存するもう一人の李箱、九天を仰いで号哭してこの寒山に一片石を立てる。愛人貞姫はそなたの歿後、数三人の秘妾になったことあつてむしろ長寿するゆえ、地下の李箱よ! 願うところ瞑目

せよ。

さほどだらしはないながらこれぐらいにして、あれこれ薄汚い粗をそっと韜晦しよう。もうミスは以上の妙技で兼ねて埋めて再び私は私の半生の陣容後日に関してゆっくり考慮することにする。以上。

歴代のエピグラムと傾国の鉄則が全て、私にとっては私の偽善を暗葬する一つのスムーズな口実に過ぎない。実に私は私の落命の所でも臨終の合理化の為に कोरोのように桃色の腕を見ることも出来ない上、トルストイのように嘆息してやりたいちっぽけな金言の追憶も持たず、ただいきなり足をくじいて倒れるようにすらっと死んでいく。

①～③は「或旧友へ送る手記」での引用であるが、自殺方法として毒物を飲むことや家族のために物件の値段が下がってもいい場所、家族に気付かれないように死ぬことを述べている。このような語り方は「終生記」でも見つけることができる。④と⑤がそれであるが、④は終生記つまり遺書を書こうとしている作中人物「私」が終生方法の一つとして「ずる賢い少女」のデートに応じようとする場面である。芥川とは違って、虚構での話であるが、死の方法の一つを提示していることが一致している。デートに応じることによって悠々と終生を楽しめるのである。⑤は作中の語り手の叙述から作中人物の意識、そして作家李箱の声へと移る文章の代表的な例であるが、貞姫に「ちょっかい」を出すため、そして失敗したため、そのことよっての恥ずかしさ、つまり人生の「粗」ができたという遊戯的な姿を見せている。したがってここでの墓地に入っている人物は実際ではなく、女性を口説けないことが昏倒するほどの恥ずかしさであることへの修辭学的な遊戯である。つまりポーズとしての死を意味してはいるが、死の時期を書いていることが興味深い。偶然かは分からないが、実際李箱が死んだのが一九三七年四月十七日である。その死の背後には無実でありながらも政治犯扱いでの牢獄生活があり、それよっての結核の悪化という悲劇が隠れてはいるが、作品を書く時期の一九三六年の時点でも難病だった結核よって犯されていく自身の体の不具合の状況を予測していたのである。その予想日付が三月三日ではなかろうか。ともあれ、それは死ぬ時期を明記したという意味で芥川の遺書と共通点を持つのである。さらに李箱自身の声に移っては自殺方法として静かに死んでいくことを述べているのは、芥川が誰にも知らない場所で死んでいく方法と一致していることが分かる。

一方芥川は、引用で分かるように自殺を考えるに当たって少し迷いを見せている。いざ死のうとしたら死ぬのが怖くなり、むしろ生に執着するようになり、それで死ぬためには「スプリング・ボオド」が必要となるのである。李箱においても頻繁に訪れた死の恐怖は段々遊戯として発達していくのであるが、作品の中に遊戯としての自殺勧誘は多く登場する。次の引用はその一つである。

死は食前の煙草一口よりもやりやすい。ところが死は決して彼の窓戸を叩くはずがな

いだろうと早合点している彼だった。しかし唯一つこの例外があることを認定する。

A double Suicide

それはしかし決して愛情の妨害を受けてはいけないという条件が付いた。唯何も理解しないで、お互いに「スプリングボオド」の役割をすることだけを、十分利用することだけを希望する。彼らは又遺書を書くだろう。それは多分精一杯華麗な愛情と厭世の文字でいっぱいになるようにするものだろう。

このように世の中を騙して、わざと自分を騙すことによって本年の自分を一見見るに高貴に飾ろうとするものだ。（中略）これが半端でない力で彼の精神生活を拘束する前に他の一番有効な結果を予期する処罰を敢行しなければならないのを考えて、少し無理だと知っていながら、賭けのつもりで少女に Double Suicide を「プロポーズ」してみたのだった。

引用は「断髪」の一部であるが、先にも述べたように「終生記」と同じモチーフとしての少女系列の回想のようなもので、遺書の一つとしても捉えるべき作品である。引用でも明らかなように主人公は自殺する勇氣は持っておらず、ポーズとして死ぬことを語っている。そのため「スプリング・ボオド」が必要になるのである。「愛情の妨害を受けてはいけない」条件付はひたすらあの世と一緒にいくための目的性を帯びるようになる。

ここでもう一つ指摘したいのが「Double Suicide」という単語の選びである。これが他の作家も使ったかは知る道がないが、芥川の「或阿呆の一生」で使われた単語であることは確かである。この作品は「或旧友へ送る手記」にも書かれているように自分の生涯を振り返ったもう一つの遺書としての作品であり、普段から読んでいた李箱にとってはこの作品からの影響関係も多く見られているのであるが、たとえば人生を振り返る伝記的な書き方やアフォーリズム的な書き方などはそのことを裏付けてくれる。ここでは詳しいことは省略することにする。とみあれ、引用の文書は最も決定的な文章である。まず、語り手は三人称の「彼」でありながら遠近法においては内部遠近法を使っている。「或阿呆の一生」の文章は周知の通り、「彼は」で語られている。これは自分を客観視しながらも自分の内部の心境を表した文体として、芥川の特有の文章である。特に「四十七 火あそび」での単語は李箱の遺書が芥川の遺書の影響を受けたことを明らかに語ってくれる。

彼女はかがやかしい顔をしてゐた。それは丁度朝日の光の薄氷にさしてゐるやうだった。彼は彼女に好意を持つてゐた。しかし恋愛は感じてゐなかつた。のみならず彼女の体には指一つ触らずにゐたのだった。

「死にたがつていらつしやるのですつてね。」「ええ。—いえ、死にたがつてゐるよりも生きることに飽きてゐるのです。」

彼等はかう云ふ問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニック・スワイサイドですね。」

「ダブル・プラトニック・スワイサイド。」

彼は彼自身の落ちていてゐるのを不思議に思はずにはゐられなかつた。

ここでみるように「プラトニック・スワイサイド」という単語使いが一致している。さらに主人公は、恋愛感情を持たず、多少遊びじみた感覚で死ぬことを決めているが、恋愛感情無しで、遊戯としての死の遊びは「断髪」の引用と一致している。李箱は先にも述べたように自殺は常に考えていたものの、死ぬ勇気や方法が分からず、それが繰り返されるうちに感覚が段々薄めてきて、ついに遊びとしての遊戯、つまり「自殺ポオズ」に転落してしまう。このようなポーズの原型は芥川作品にあるのである。「或旧友へ送る手記」にも「僕は冷ややかにこの準備を終り、今は唯死と遊んでゐる。」と述べているところからも考えられる。そのため、両作品を遺書ではなく作品として書かれたことが改めて言えるのである。

以上李箱の十三篇の遺書の問題点やそれに関わる芥川龍之介の影響について述べたが、李箱は芥川の影響を受け、芸術についての情熱として「終生記」を書き、またその他自分の過去を回想しながら、その思い出を遺書として残そうとしたことが分かってきた。ただし芥川が自殺を決心し、全ての準備を終わらせた後、死の恐怖を超克した遊戯としての文章であるのに比べて李箱の方は、最初から自殺を果たす勇気は持たず、ただポーズとしての遊戯であったことを、李箱の特徴であることを指摘しながら終わりたいと思う。

(しん・でぎ 本学研究科博士後期課程)

¹ 「私信七」『李箱文学全集3 随筆』文学思想社一九九三、九

² 『李箱文学全集2 小説』文学思想社一九九一、十

³ 『文学思想』一九七四、四

⁴ 教学社、一九六八、八

⁵ 金成寿『李箱小説の解釈』太学社

⁶ このアフォリズムもまた芥川が好んで使った手法であり、李箱が作品の冒頭、作品の間に並べるなど、頻繁に使ったことから影響のことが考えられる。

⁷ 『李箱研究』文学思想社一九八七、十二。現在のほとんどの研究者は金の論に従って解釈しているが、中には李京垣(『李箱、徹天の修辞学』ソミョン出版二〇〇〇、四)のように郤を女性の性器、珊瑚を男性の性器の象徴として把握し、それは女性が男性を捨てる意味になるため、少女が李箱を捨てる物語として捉える研究者もいる。

⁸ 「私信五」『李箱文学全集3 随筆』文学思想社一九九三、九。これは李箱の芸術至上主義を窺える文章として芥川の芸術至上主義と比較すべき問題である。

⁹ このような構成やモチーフは「或阿呆の一生」の四十九章「剥製の白鳥」とも類似性を見せている。「剥製の白鳥」との関連性を照明してくれるのは「翼」のアフォリズムであるが、「剥製になった天才を知っていますか」は多くの研究者によって芥川を指していることが指摘されている。李箱の芸術に関する情熱の断面がうかがえる。

¹⁰ 注4と同じ。

¹¹ 『李箱研究』文学思想社一九八七、十二

¹² 『芥川龍之介全集』筑摩書房一九九五、十一